

エクステンジリングス

甘木数彦

第二章

—

目の前のイーゼルに立て掛けられたスケッチブックへ、無心に陰影を加えていく。描きながら鳶春は次々に鉛筆を持ち替えていくが、自分ではそれを意識していない。今、取り組んでいるのはあの風景だった。生え揃った草に居心地良く古びたテント、画面左端には小さく川が見えている。どことも知れない、都市の狭間。全体はすでに浮かび上がっており、あとは細部を詰めていくばかりだった。

「風景画か」

気が付くと、田村厘一が背後から覗き込んでいた。厘一は鳶春と同じ美術部員で近所同士。幼い頃からの付き合いだった。

「イギリスの風景。写真で見たんだけど、どう思う？」

鳶春はあっさり嘘を吐くと、厘一を見つめた。厘一はスケッチブックから少し離れると、絵を眺めた。

「相変わらず技術は凄い。けど、やっぱ記録写真みたいだな」

「だよなあ」

鳶春は同意すると、腕を組んだ。

記録写真。それは鳶春の作品をよく表現していた。描写力や制作力、素材に対する扱いという点で、鳶春は飛び抜けたものを持っていた。しかし、奇妙なことに鳶春の生み出す物はどれも味気なく、「上手い」という以外の印象を他人に与えることができなかった。写実以外に関しても同様で、そもそもアイデアが浮かばない上に、どうにか作り上げる作品も細工の巧みさが目立つばかりで、面白みもなければデザイン的な魅力もない。

鳶春は椅子から立ち上がると厘一の隣に立ち、自分の描いた絵をよく眺めてみた。少し距離を置いて目にするそれは自分が見た景色をそのまま説明していた。あの場所の記録としては満足のいくものだ。だが、あそこに漂っていた独特の息遣いや開放感はまるで伝わってこない。

鳶春はイーゼル脇の机へ持っていた鉛筆を置くと、床にあったバッグを取り上げた。

「もう帰るのか？」

「ああ。駄目だ。今日はいまいち」

「そっか。じゃ、また明日な」

「おう。明日な」

鳶春は最後に一度だけ描きかけの絵に目を向けると、部室から出て行った。

学校を出た鳶春は真っ直ぐ家には帰らず、あの広場へ向かった。特に理由はなかったが、なんとなく足が向いたのだ。そこがちゃんと実在することをもう一度確かめたかったのかも知れない。

バスと高速エレベーターを乗り継いで病院まで向かい、先日と同じ細い隙間を進んでいく。あの日、家に帰ってから地図を何度も前に検討したのだが、今もあの場所がどこに位

置しているのかは特定できていない。それでも暗く窮屈な道を通り抜けると、そこには前回よりも明るい夕空が広がっていた。そして、先客がいた。

鳶春は心臓が縮むような感覚というものを味わったことがなかったが、それでも心臓部の配線がショートするかと思うほどには驚いた。

先客は、鳶春と同年代の少女だった。前髪を残して結い上げられた髪はダークブロンドで、顔立ちから察するに、イギリス系移民らしい。痩せた体つきや鋭く清潔そうな顔立ちだ。

鳶春は一目で少女に魅了されてしまった。今までの自分の好みのタイプには当てはまらないのだが、じつは今までそう思っていたタイプの方こそが錯覚だったのではないかという気がするくらいだ。

少女はさわやかな夕暮れを迎えている広場の中央に立って、遠く地平線の方を眺めて佇んでいる。それは描きたくなるような光景だったが、その場所の特異さを考えると不自然な感じがした。

どうしようかと考えることも忘れて鳶春が見惚れていると、不意に横を向いた少女と目が合ってしまった。少女は少しだけ驚いた顔になり、それから眉間にしわを寄せた。

「だれ？」

目が悪いのに視力を矯正してないんだな。鳶春はそう考えようとしたが、それはあり得ないことだった。それなら遠くを眺めていたはずはないし、そもそも少女の声には誰が聞いても不機嫌だと解る棘があった。

「いやおれは散歩してて、その」

「ふうん。散歩ねえええ」

少女は馬鹿にしたような声で言いながら、なおも鳶春のことを見据えている。

「そっちこそ、この人？」

いささか不機嫌そうな口調で鳶春は尋ねた。とたんに少女は不機嫌そうな態度を崩した。

「え？ わたし？ ああ、えっと。そうか！ わたしも歩き回ってたらここに出ちゃって。この街には越してきたばかりでさ。で、ここどこ？ とか思ってたらいきなりあなたが出てくるし」普通に喋ると、とたんに少女の雰囲気は変わった。シャープな外見は変わらないが、人懐っこい雰囲気だ。「じゃあ、あなたもここが何だかは知らないわけか」

そこで少女は笑顔になり、手を差し出してきた。

「わたし、ウェンディ。宇部・ウェンディ」

「おれは、九堀鳶春」

名乗りながら差し出された手を握り返す。握手を求められたことなど初めてのことだったが、ウェンディは軽く手を上下させるとあっさり手を離してしまった。あまりにも自然な感じだったので、鳶春はウェンディの手の感触もよくわからなかった。

「とりあえず、座らない？」

ウェンディに促され、二人は並んで腰を下ろした。

「ここにはよく来るの？」

「いや。二回目。この前たまたま見付けて」

「そうなんだ？」

そこで会話が途切れてしまう。鳶春は今にもウェンディが立ち上がり、「それじゃ」など

と言いながら帰ってしまいそうな気がした。横目に盗み見ると、ウェンディはなにやら真面目な顔で正面を向いている。

「引っ越してきたばかりって、イギリスから？」

どうにか話題を振ってみる。

「え？ なに？」

「いやだから、イギリスから越してきたの？」

「うん。留学で。ここに伯父さんがいてさ」

「日本語、上手いな」

「ありがと。父が日本人だから」

さっぱり会話が続かない。そのことで焦っている自分に、余計焦ってしまう。

「この街に来てみて、どう？」

自分の会話力のなさに失望しながらも、沈黙に耐えられず鳶春は言った。

「ああ、全部屋内って変だよなー」

答えながらウェンディは傍らの芝をいじっている。完全に退屈している感じた。

「屋上庭園にはもう行った？」

「まだだけど」

「よかったら今から行かない？ おれが案内するよ。日が暮れてからだと星空がきれいで、遠くに夜景も見えるし……」

精一杯気軽さを装う。

ウェンディは何も言わない。鳶春は機械の体の便利さを実感した。もし生身だったら、いまごろ汗だくになっていただろう。

「初対面の男にあっさり付いて行くと思う？」

「うっ。いや、思いません。ごめん。じゃなくって、ほら、もしよかったらってことで」
言い方が面白かったのか、ウェンディは短く笑った。ひよっとしたら馬鹿にされただけかもしれない。

「とりあえず今日は、近くの駅まで案内してくれればいいかな。あなたが出てきたのとは逆から来たんだけど、住宅街の真ん中でさ。ここ、詳しいんでしょ？ また気が向いたら連絡するかもしれないから、名刺ちょうだい」

駅くらいなら表通りに出てから端末に案内してもらえばいいような気もしたが、わざわざ断る気にはなれなかった。むしろ、その言葉に期待感が高まる。そこで鳶春は言われるままに端末を取り出すと、登録してあるデータをウェンディに送った。もちろん、ウェンディのデータはもらえなかった。

「高校、近いの？」

鳶春のデータを見ながら、ウェンディが尋ねる。

「いや。ちょっと遠い。そっちはどこ？」

「ああ。ミックススクール」

こともなげに言うとウェンディは立ち上がった。

「金持ちなんだな」

鳶春も立ち上がる。

「親はね。わたしはそうでもないよ。だから他の子と付き合うのちょっと苦しくてさ。み

んな性格は悪くないんだけど、当然こっちも金があると思ってるのは困るんだよね。で、どっち？」

鳶春はウェンディを先導してもと来た道を引き返す。

「そういえば、知らないヤツと真っ暗な道を歩くのはいいの？」

鳶春の問いへウェンディは肩をすくめてみせた。

「どうせそっちの道も狭いんでしょ？そんな道でどうこうできるわけじゃない。それに、わたしの伯父さんって刑事だから。変な気を起こすのは非常にマズイと思うよ」
要するに、いいように使われてるだけだよな。内心そう思ったが口には出さず、鳶春は狭間道へと入っていった。

真闇をゆっくりと進むあいだは、ウェンディの質問に鳶春が答えるという形で話が進んでいった。おかげで話題を探す手間は省けたが、なんだか面接されているようで落ち着かなかった。それに、ときどき互いの指先がぶつかるのも気詰まりだった。

話題はいつしか、二人が後にしたばかりのあの広場のことへと移っていた。

「ねえ。あそこって本当はどこなんだろ？」

ウェンディの声はどういう反響の作用なのか、前の方から聞こえる。

「さあ。たぶん、あのドアの向こうの人が気分転換とかする場所なんだろうけど」

「よく有名にならないね」

「まあこの道自体、誰だって通れるようなものじゃないし、そもそも地図の上であそこがどの辺りなのかハッキリしない」

「うーん。でも、今まで誰も知らないってのはおかしくない？」

「誰も知らないかどうかは判らないけど」

「いや、それって不自然だって。黙っとこうと思うのは鳶春くらいでしょ。だいいち、メンテナンスロボが見てる映像って公開されてるんでしょ？ それなら一人くらいは気付いた人がいてもいいと思うんだけど」

ウェンディの言うとおりであった。鳶春自身、以前は狭間道の入り口を求めてそうした映像をよく探していたが、そういえばこのことは目にした覚えがない。もっとも、目にしていたとしても奥行きのある道だとは気付かず、見落としていた可能性はある。

「この街が入ってる建物って、イギリスの会社が設計したんだよね？」

「ああ。その会社はもう解散したとかいう話だけ」

「英語はできる？」

「全然」

「じゃ、イギリスの方に何か資料がないか調べてみる。鳶春も何か調べてみてよ」

「調べるのはいいけど、なんで？」

にわかに芽生えた期待を悟られないよう気を付けながら、鳶春は尋ねた。

「じつは、留学のための奨学金借りるのに条件があって。日本滞在記みたいなのを書いてウェブにアップしないとイケないの。まあ日記程度でもいいんだけど、優秀な滞在記だと認められれば返済が免除されるんだよね。だから、あそこのこと調べる課程とか結果を発表すれば、免除も狙えるんじゃないかなー、なんて」

期待の芽はしばむどころか、一瞬で根腐れを起こしてしまった。わざわざ駅まで送るよう頼んだのも、これが目的だったのではないかという気がしたのだ。「じつは」という打ち

明け話的な言葉も、その感じを強めている。

断ろうか。そう考えていると、近くからウェンディの声がした。今度はちゃんと後ろから聞こえる。

「調べ物とか一緒にすれば、もっと仲良くなれそうだよな」

自分は馬鹿な阿呆だ。そう思いながらも、鳶春はその言葉を無視することができなかった。

ウェンディと話しながらゆっくり歩いていたせいもあって、家に帰るのが遅くなってしまった。とりあえず駅からメールを送ってはおいたのだが、それでも鳶春の母、美織はかなり心配していたようで、すぐに仕事部屋から出てきた。美織はドイツ語の技術書やマニュアルが専門の翻訳家だった。

「おかえりなさい」

「ただいま。悪い。遅くなって」

「それはいいんだけど」

そこで美織は一步離れると、まるで鳶春が作品を眺めるようにして、鳶春のことを眺めた。昔からの習慣で、鳶春が気付かないうちに人工皮膚を何かに引っかけて破いたりしていないかをチェックしているのだ。幼い頃ならともかく今ではそんなことはまずないのだが、習慣というのはなかなか変わらないものだった。鳶春は美織に背中を向けて後ろも見せる。

「はい。いいよ」

鳶春は靴を脱いで家に上がると美織の脇を抜けて、自分の部屋へ向かう。

部屋に入った鳶春はバッグを床に置くと、ベッドに寝ころんだ。ベッドの下に置かれた非接触型の充電器から体に電気が流れ込む、少しくすぐったいような気持ちよさ。脳がそんなふうを感じるはずはないそうなのだが、そう言われても毎日のようにそれを体感している鳶春としては納得のいかない話だった。

しばらく仰向けになって天井を見上げていた鳶春は腹這いになると、枕元に置いてあった薄いタブレットを手に取り、電源を入れた。寝る前に読みかけていた音楽雑誌のページが表示される。鳶春はインタビューを読んだり、新曲のデモを再生したりしていたが、やがて雑誌を閉じるとネットにアクセスした。市内の地図を呼び出すと、デフォルトで表示するよう指定されている場所が表示される。病院近くの、あの道を含む一帯だ。

地図上のそこは幾つかの建物やただの仕切り壁が切れ目なく接しながら構成している、全長一キロほどのだいたい真っ直ぐなラインということになっている。もちろん、どこにも広場らしい所はないし、螺旋も描いていない。道の反対側の出口は地図上も実際も一致しているが、中でカーブしている感じからすると、もうすこし左右どちらかにずれている方が自然な気がした。

ふと思いついた鳶春は地図のその部分を範囲指定し、過去に記録された画像から一般に公開されているものを表示させた。画質の荒い写真が何枚も並び、画面を埋め尽くす。

狭い場所の写真なので、どれもアングルに大差はなかった。壁の一角所に、黒々とした切れ目が入っている。鳶春はサムネールに次々と目を通していく。すると、奇妙なことに気付いた。どの写真も道の入り口は写しているのに、肝心のそれより奥は写していないのだ。撮影が開始された初期の頃まで遡っても、それは同じだった。通常なら暗い場所でも暗視モードで撮影はされるし、それでも光量が足りなければフラッシュがたかれるはずだ。

真っ先に二つの可能性が浮かんだ。何らかの理由で画像が非公開になっているか、そもそもメンテナンスロボットなどがそこには立ち入っていないかだ。ただ、どちらもあり得ない気がした。市内の治安を乱すものをいち早く発見するため、ロボットはどんなに人が通らなさそうな場所でも人が通行できそうなら必ず通るはずだし、非公開にされる理由も思い当たらない。公開が途中で中止されたなら、公開停止になった日時が表示されることになっている。鳶春は第三の理由を考えてみたが、納得できるものは何も見付けられなかった。

発見したことだけでもウェンディに伝えようと思い、鳶春はバッグから端末を取り出した。そこで自分が相手の連絡先を知らないことに思い至る。あの場所について協力して調べるなどと話していたせいで、すっかり自分もウェンディの連絡先を知っているような気になっていただけだった。鳶春は手にした端末を名残惜しそうにテーブルへ置く。

何だか一気にどうでもよくなってしまい、鳶春は再びベッドに寝転がると雑誌の続きを読み始めた。しばらくすると端末の振動がテーブルの表面を叩いた。鳶春は端末の振動を止めると、リビングに向かった。夕飯の時間だ。

夕飯はコロッケとみそ汁だった。もちろん、食べるのは母親だけだ。鳶春は戸棚から大きなスープマグを取り出すと、キッチンの片隅にあるポリタンクの脇に取り付けられたプラスチック製の蛇口をひねった。グラスにやや粘りけのある透明な液体が注がれる。鳶春に唯一残された有機物である脳を養うための飲み物だ。他のどんな有機物も機体が故障する原因となるので、摂取することはできない。

鳶春は自分の椅子に座ると、液体を一口すすった。何の味もしない。味覚は備わっていないのだ。辛うじて微かに何か柑橘系の香りが感じられるが、それすらも鼻の中の受容器が生み出す幻想にすぎない。本当は石油のような臭いがするらしい。

「今日はどこに行ったの？」

黙ってキャベツの千切りを食べていた美織が尋ねる。鳶春は散歩していて遅くなると連絡していたのだ。

「うん。まあ北の方」

鳶春は気のない返事をする。夕食を母と一緒に取るのも習慣の一つだったが、正直なところ鳶春にとっては皮膚のかぎ裂きを探されるよりも気の進まないものだった。それでも母親に付き合うのは、自分のこの体が親にとって様々な意味で負担になっているという負い目があるからでしかない。法的に中絶が可能な期間内に、鳶春が深刻な肉体的な病を抱えていることは判ったはずだ。それでも両親は自分を生む決意をしてくれたのだから。

その結果、不幸な人生を歩んでいるというのならともかく、これまでの生活へ可もなく不可もない感想を抱いている鳶春としては、両親の決意に感謝するしかなかった。それは前向きな選択ではなく、自分の境遇と両親の態度に対する、ある種の折り合いだった。

充電と相まって、擬似的に脳へ伝達される空腹感は急速に弱まっていった。カップの中の液体はなかなか無くならない。いいかげん柑橘系の風味は飽き飽きしているのだが、需要が少ないせいで他にフレーバーがないのだ。幼い頃は親の食べているものをねだって困らせたりもしたのだが、親に隠れて一度ハンバーガーを食べて死にかけて以来、そういうことはしなくなった。

「そういえば、病院からメール来てたんだけど？」

「あ、そう」

鳶春はなるべく平静さを保って言う。

「体、新しくするんだって？ 冬休みにどうかっていうんだけど、母さん何も聞かされてないよね？」

「ごめん」

美織は溜息を吐くと、箸を置いた。

「謝って欲しいわけじゃないんだけど」

「体のことで隠し事はするな、だろ？」

「それもあるけど、どうしてこのこと黙ってたのか理由をね」

「忘れてた」

美織の顔が怒りに強張る。血色の悪い頬を中心に、顔が赤みを帯びる。

「人の話は途中で遮らない！」

「ああ」

「ああ、じゃなくてこっちを」

急に言葉を途切れさせると、美織はもう一度溜息を吐いて目を強く閉じた。目尻に寄るしわが意外なほど深い。

「とにかく、どうして言わなかったのか本当の理由を聞かせてちょうだい。母さんはね、あなたが何か悩みを抱えてるんじゃないかって、いつも心配なの」

目を閉じたまま言うせいで、それは何かのセリフを暗唱しているようだった。

鳶春はしばらく黙っていたがやがていつものように、自分の存在がどれだけ両親を失望させたかということを思い出し、妥協した。

「急に自分が何年も歳を取るってのは、あんまり楽しいことじゃなくて。いや、しょうがないのは解ってるけどさ」

実際には特に理由などなかったのに、そうやって口に出してみると、本当に最初からそう思っていたような気がしてくる。

「そう……。ごめんなさい。そんな辛い思いしてたなんて。打ち明けてくれてありがとう」
自分で問い詰めておいてそりゃないだろう、と言いたいところを我慢して鳶春はうつむいた。早く部屋に戻りたかった。

玄関で物音がした。やがて父の寿一郎が入ってくる。寿一郎は人体と機体や人工内臓を接続する様々なパーツを作るメーカーで、図面設計を担当していた。よほど仕事が忙しいらしく、一度家を出ると数日間はずりこまない。今回も会うのは何日ぶりだろうか。よほど疲れているらしく、歩く足取りはふらついているし、目はほとんど閉じている。

「ただいま」

言いながら椅子に座ると、すぐにテーブルへ突っ伏してしまった。

「おかえりなさい」

美織は立ち上がるとキッチンへ行き、お茶の入った湯飲みを持って戻ってくる。

「はい、これ」

「置いといて」

差し出された湯飲みを見ようとせず、寿一郎は言う。

「ゴハンは？」

「まだ。お茶漬けでいい。いや、今はいい。それより、何日経った？」

「四日」

「おお。浦島太郎みたいだ」

寿一郎はそう言うと、途切れ途切れに鼻歌を歌い始めた。童謡の浦島太郎に似ているが、あまりにも越えに力がないせいでハッキリしない。やがてその歌声も消えてしまった。鳶春は静かに立ち上がるとカップをキッチンの流しへ置き、自分の部屋へ戻った。